

洗礼者ヨハネやファリサイ人が目指したことは、いわば信仰の覚醒。ヨハネの弟子は師のごとくに(マルコ 1:6)禁欲勤勉で(2:18)、ファリサイ人もまた同様であった(ルカ 18:12)。そんな彼らの弟子が偉く見えたせいか、人々はイエスの所に来て比較しながら問う。

「なぜ、あなたの弟子たちは断食しないのか(マルコ 2:18)」と。おそらく非難がましい気持ちを含めてのこと、どことなく皮肉めいた口調だ。

イエスは、「花婿と一緒にいるのに、婚礼の客は断食できるだろうか。花婿と一緒にいるかぎり、断食はできない(2:19)」と答えた。

いきなりこれでは、人々は納得も理解もしないだろう。だがイエスは当然のごとく、自分は「花婿」に、民は「婚礼の客」に譬えている。たとえ不可解でも、こんなイエスの言葉やふるまいが多く的心を捉え、目覚めさせた。これもまた信仰覚醒運動なのか。

私は十代の頃から放浪の真似事をした。瘦身墨衣の雲水に憧れたが、尊大華美な住職を見、「雲水も修行期間が終わればこうか」と幻滅した。

周囲は私に無理解だったが、その反動のせいか私は「なぜ、あなたの弟子たちは断食しないのか(2:18)」といった調子で他者を批判した。己を守るために他者を責め、自己を正当化する牢獄にいた。今でもうっかり入牢してしまうことがあるが、もううんざり。

教会には「クリスチャンらしさ」を暗に押しつける空気がある。逆にまた、その律法的な傾向を批判する一連の者たちもいる。どちらかという私は後者だったが、傲慢でもあった。

「なぜ、あなたの弟子たちは～」と批判することで自分を「正しい」側に置き、個々人の特徴を見過ぎしがちだった。

「花婿と一緒にいるのに、婚礼の客は断食できるだろうか(2:19)」とイエスは答えた。この言葉を少し言い換えてみよう。

「今、花婿(イエス)が君と居て、御馳走を前にしている。それなのに君は、何のために断食という意地を張り通すのか」。あるいは「クリスチャンらしさで神様のご機嫌を取ろうとしているようだが、そんなことせずとも、キリストである私が共にいて、恵みはたっぷりじゃないか」。

イエスは律法学者に答える形で、重要な掟を二つ挙げた(12:29~31)。「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい(申命 6:5)」、「自分を愛するように隣人を愛しなさい(ルカ 19:18)」。

この二つの掟はともによく知られていたもの。ところがイエスによってそれが語られると、律法学者さえも目覚めさせる新鮮な「根っこの教え」として響いた(マルコ 12:32~33)。

すなわち「あなたがたに書いているのは新しい掟ではなく古い掟で、すでに聞いたことのある言葉。しかし新しい掟として書いている。そのことは、イエスにも、あなたがたにも真実(1ヨハネ 2:7~8)」。「根っこの言葉」はすでに私たちも聞いている事柄だが、それはキリストと共にあってこそ新鮮に響く。

キリストという「根っこ」は「花婿と一緒にいる婚礼(マルコ 2:19)」。根っこにつながっていれば、他の諸々に相当な弾力が生じる。

花婿と一緒にいて、その愛が私たちを捉えて離さないから、もはや断食や勤勉さ、クリスチャンっぽい律法にも脅かされない。花婿の光を反射させるように「私たちの神、主を愛し尽くす(12:30)」。根っこからの愛を手渡すようにして、「隣人を自分のように愛する(12:31)」。



#### 《おまけのひとこと》

夏 幾度も草刈りをする 「益草」も「雑草」も 根は抜かず地表の草だけを刈る 根のすべてが硬直した土を砕くキリスト オオバコ カタバミ 私も あなたも それぞれ根につながっている